令和７年４月15日発行

３年学年通信　修学旅行号

# LUCKY SEVEN

～合言葉は「静と動」～

## 命どぅ宝

　沖縄での３日間は最高のものとなりました。みなさんの願いも届いて、天候にも恵まれ本当に忘れられない修学旅行となったのではないでしょうか。

　１日目は神戸空港に集合し飛行機に乗りました。初めて飛行機に乗ったという人も多かったのではないでしょうか。機体が浮いたとき手を握り合っている人、驚きと喜びで目を丸くしている人、慣れた様子の人など様々でした。そして沖縄の上空に到達して、見えた海の美しさにみんな感動していましたね。

飛行機を降りてバスへ乗り込み、初日の活動は平和学習のため、まずはひめゆり平和祈念資料館へと向かいました。到着してひめゆりの塔のまえでセレモニーを行い、千羽鶴を捧げました。そのあと平和学習班で館内を見学し、平和についての学びを深めていきました。

　みなさんと近い年齢であったひめゆり学徒隊は，戦争が起こる前まではみなさんと同じように将来の夢・希望をもって勉強し，楽しい日々を送っていました。しかし戦争がはじまり毎日の授業は応急処置などの軍事訓練となり，ある日沖縄戦に看護要員として動員されたのでした。ひめゆり学徒隊の主な任務は看護補助つまり看護師の雑用でした。負傷兵に食事を与えたり，排せつの手伝いをしたり，傷に湧いたウジを取ったりとなんでもやりました。中でも大変だったのは腕や脚の切断です。腕や脚を負傷した兵士は負傷した部分の壊死の進行を防ぐために容赦なく負傷部を切断されました。麻酔も器具も満足にはありません。ひめゆり学徒隊が患部をろうそくで照らしながら医者がのこぎりで切り離しました。当然患者は激痛に耐えかねて暴れますが看護師やひめゆり学徒隊が押さえつけながらなんとか切断が実行されたのでした。こういった手術が次から次へと休みなく続いたといいます。切り離した手足は雑用係のひめゆり学徒隊がアメリカ軍の射撃の合間を縫ってガマの外へ捨てに行きました。他にもガマから離れた調理場まで食事をとりに行く飯あげと呼ばれる命がけの任務があり，その間にアメリカ軍の戦艦からの砲撃や戦闘機による銃撃を受けて亡くなった女学生が大勢いました。またこれだけの重労働をしていても，女学生たちに与えられた１日の食事はピンポン玉くらいの大きさのおにぎり一個だけだったそうです。自分たちと同年代の女学生たちがこんなことを３か月間も続けていたのかと想像した人も多かったと思います。このような過酷な環境で働かされていたにもかかわらず，沖縄戦終盤に突然日本軍にこれからは自らの判断で行動してくださいと解散を命じられました。日本軍としては次から次へとやってくる負傷兵の面倒を見ていてもきりがない，かといって今まで働いてくれたひめゆり学徒隊をかくまってやる余裕もないということで女学生たちは集められるだけ集められて過酷な環境で働かされ急に解散を命じられました。女学生たちは行き場がなく洞窟内で身をひそめているうちに、アメリカ軍に見つかりました。学校で反米教育があったので降伏をせず殺されたり，殺される前に海に身を投げ出したりして何の罪もない若い命が失われました。

資料館には女学生たちの手紙や証言映像もありました。必死に生き抜こうとした人、死んだほうがましだと考えた人、目の前で友人たちが死んでいく姿を目の当たりにした人などの声を聴いて心が痛かったと思います。資料館を出た後、何人かに声をかけると「時間が足りなかった。」「もっと学びたい。」といっていました。家族で沖縄を訪れる予定があったり、大人になって沖縄に行く機会があれば、また是非足を運んでもらいたいと思います。また沖縄県平和祈念資料館という大きな資料館もあります。そちらも調べてみてもらえればと思います。

ひめゆり平和祈念資料をあとにして、次にアブチラガマへと向かいました。アブチラガマは糸数にある自然洞窟です。沖縄戦時、もともとは避難指定壕でしたが、戦争が激しくなるにつれて病院の分室となりました。軍医、看護婦、ひめゆり学徒隊が配属され、全長２７０ｍのガマ内は６００人以上の負傷兵で埋め尽くされたといいます。アブチラガマのアブは深い縦の洞穴、チラは崖を意味します。

アブチラガマの体験では、まず絶望の間という場所で暗闇体験をしました。絶望の間は治療をしても戦えないと判断された負傷兵たちが捨てられた場所です。その負傷兵たちはまだ生きているにも関わらず暗いガマの奥深くで、人の上に人を積み重ねられ、ただ死を待つだけだったのでした。そんな場所での暗闇体験は衝撃的だったのではないでしょうか。あれだけの暗闇の中でただ死を待つのみ。想像するだけでも恐怖でいっぱいだったと思います。そのあとひめゆり学徒隊が働いていた場所へと移動しました。ごつごつとした岩で囲まれたところに便所があり、糞や尿を危険なガマの外に捨てに行くのも女学生たちの仕事でした。女学生たちは休む間もなく、斜めに傾いた岩壁で仮眠をとっていたという話も聞いて「そんな状態で風呂も入れないなんて考えられない。」「こんなところで寝れるわけがない。」と声を漏らしている人もいました。実際にはそんな想像をもはるかに超える過酷な環境だったのではないでしょうか。最後の場所では投げ込まれた爆弾で岩が黒焦げになっており、爆撃で飛ばされた金属が天井に張り付いたまま状態でした。それは地上戦の激しさを物語っており、改めて動員された人たちは命がけの任務を行っていたということを思い知らされました。

これらの平和学習を通して戦争の悲惨さ・愚かさに気づくことができたと思います。『命どぅ宝』という言葉を沖縄ではよく目にします。それは沖縄の方言で『命こそ宝』という意味だそうです。

これからも平和を願い、命を大切にしてください。

つづく

---

## 保護者のみなさんへ

今回の修学旅行においては初日の昼食の準備やお見送り、３日目のお出迎えなどご協力をありがとうございました。３日目に少し雨がぱらつく瞬間がありましたが、ほぼ天候に恵まれすべての行程を予定通りに進めることができました。学びあり、楽しみありのすばらしい修学旅行となったと思います。子どもたちの真剣な眼差し、めいいっぱいの笑顔を見ることができ私たちも本当に幸せな時間を過ごすことができました。

解散した後に校長先生が３日間のたくさんの写真を学校ホームページにあげております。それらを見ながら子どもたちとの会話を弾ませていただけたらと思います。

これからの学校生活も引き続きよろしくお願い致します。

石原　健太郎